

古代の須恵器復元

よしもと しゅうほう  
好本 宗峯

(本名 年勝 一九三八〜二〇二〇)

― 古代 須恵器を愛した陶芸家 ―



一 宗峯さん、備前焼の本場 備前市伊部に誕生

よしもと としかつ

好本年勝さんは、3人兄妹の長男として昭和13年2月10日、備前

びぜんし いんべ

としかつ しょうねん

焼の繁栄地、岡山県備前市伊部に生まれました。年勝少年が7歳の時、第二次世界大戦でお父さんが戦死します。残されたお母さんは3人の子

供を一人で育てなければいけませんでした。

としかつ

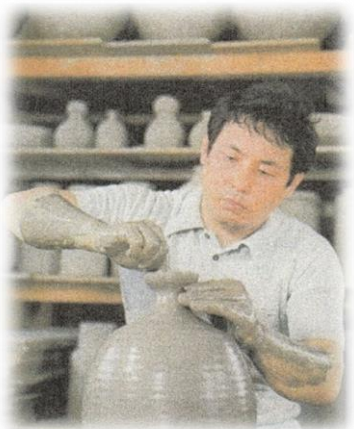
大人になった年勝さんは、仲間と共同で機

械の設計事務所を立ち上げ、会社経営に携

たずさ

わります。その頃、陶芸を営む大好きな叔父

さんの家に入りし、陶芸の世界を肌で感じ



ていきます。すると、どうでしょう、小さい頃からもの作りが大好きだった年勝さんは、しだいに陶芸ひに惹かれていく自分を発見します。やがて、備前焼陶芸家 故藤田佳郎ふじたよしろうさんの仕事を手伝うようになると、備前焼の奥深さを発見。27歳から本格的に陶芸の指導を受け、34歳、名前を好本宗峯よしもとしゅうほう（以下、宗峯さん）と改めました。

立ち上げた会社を閉じ、自宅に半地下窯はんちかかまを築き、本格的に陶芸の道を歩み始めました。

昭和41年 28歳で美代子夫人と結婚し、3人の息子に恵まれます。

## 二 宗峯さん 備前焼の原点「須恵器」に出会う



昭和52年 ある日、宗峯さんは、古来朝鮮通信使が訪れていた港町ちようせんつうしんし、牛窓町の寒風考古館さむかぜこうこかん（現・岡山県瀬戸内市）を訪れました。注①

の須恵器とうへんの陶片が千年も前に焼かれた古陶にもかかわらず、昨日焼かれたかの様に、ういういしく見えた事を思い出します。須恵器の持つ尊厳そんげんにも似た気品の中に古代の息ずかいが聞こえてくる様です。心豊かであろう古代と現代との橋渡しが出来たらと

思いつつ、備前市佐山の山の中腹ちゅうぶくに須恵器の為の本格的な穴窯を築いて焼いた作品です。古須恵器から学ぶ中に私達が忘れ去った、何かがあると思いますし、私にはここが出发点でなければと初めた仕事です。(昭和60年2月) (以上引用)

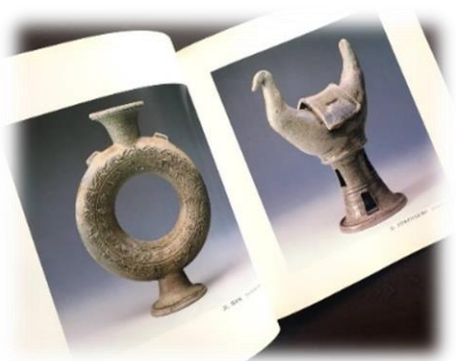
備前市佐山の山の中腹に須恵器の為の穴窯を初めて築いたのは、宗峯さん 39歳。須恵器を初めて焼いたのは、備前焼に取り組んでから16年も経ってからの事でした。それまでは、窯の扱い、取り扱う薪や窯の火力さんかえんしょうせい (酸化焰焼成・還元焰焼成) など、ひたすら焼き物が完成するまでの緻密ちみつな計算と技術、そして、精神修行の日々でした。

どんな些細ささいな仕事も決して手を抜かず、やがて目指す「須恵器復元の旅」が待ち受けていることを信じて、ひたすら励み続けました。

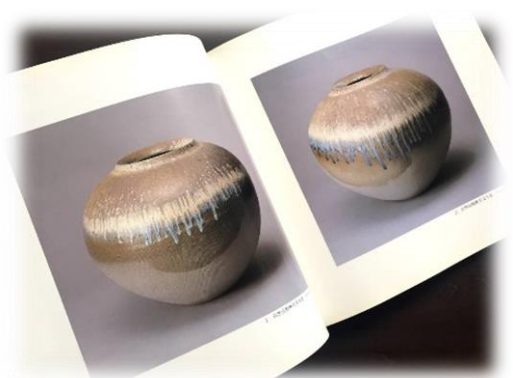
### 三 須恵器と宗峯さん

注② 好本宗峯さんは備前焼でただ一人、須恵器を制作している人物です。

須恵器とは、古墳時代こふん中頃から奈良、平安時代以後まで作られていた灰色の土器であり、祝部土器いわいべどきとも呼ばれ吸水性が少なく、硬質こうしつであることが特徴



です。朝鮮の新羅土器しんろどきの流れを汲むもので弥生土器やよいどきや土師器はじきとは異なるもので、奈良時代には備前でも焼かれていました。宗峯さんは、独立してから10年間は備前焼を焼きましたが、備前の須恵器は他の産地と比べると、はるかに白く、きめのある仕上がりであった為、珍重ちんちょうされており、貢物みつぎものとして人気を博しました。宗峯さんもその美しさに魅了みりようされ、須恵器の制作と再現を試みていくのでした。土は伊部の土を使いますが、鉄分の多い土は備前焼に使い、白っぽく鉄分の少ない土を須恵器に使います。平安時代になると尾張おわりの猿投窯さなげかまで灰釉薬はいゆうやくが大量に作られるようになったことで、須恵器は衰退すいたいしていきました。(以上引用)



須恵器を復元させるために、幾度も試行錯誤しこうさくごを繰り返し、昼夜問わず土と向き合い、轆轤ろくろを回し続け、古代須恵器の研究に余念よねんがありません。考古館や博物館の須恵器を研究しながら、模倣もほう須恵器すえきを焼くという、大変、手間のかかる復元作業いどに挑んでいきます。

古代須恵器の復元が一段落すると、次は、時代ごとの須恵器の復元に挑戦。奈良時代から平安時代に焼かれた須恵器を一つ一つ順番に、どんな細かい文様も見逃さず、忠実に復元する作業は、



思った以上に手間がかかるものでした。それだけに、復元に成功した時の喜びと達成感で大きな自信が湧き、創作須恵器の制作へ突進します。

宗峯さんの創作須恵器（自然流釉

あさめもんおおつぼ しぜんゆうつるくびはないれ あさめもんへんこめい てんざん しぜんゆう  
麻目文大壺・自然釉鶴首花入・麻目文偏壺銘 天山・自然釉

だいつきとりがたこうろ  
台付鳥形香炉（他）が展覧会で発表されると、今まで誰も見たことのない

ざんしん  
斬新な須恵器独特の風合いを持つ、花入れや大壺は、たちまち人々の

注目を集め、個展や展覧会の誘いも増え、これに伴って作陶にも拍車はくしゃが

かかり、益々、多忙を極めていきました。宗峯さんは、昭和47年、自宅

はんちかしきかま  
に半地下式窯を築き、独立した翌年には「日本工芸会東中国支部展」「美

術展」に入選し、早くも頭角とうかくを現しました。34歳で独立してから61

歳までの間に日本伝統工芸展6回入選、中日国際陶芸展5回入選、金重

陶陽賞受賞、昭和56年には日本工芸会員正会員に認定されます。それ

でも、宗峯さんは決して奢おごることなく、須恵器の神髓しんずいに迫り、ひたすら

精進を重ねるだけでした。

しらぎ  
新羅から渡ってきた須恵器は大和朝廷やまとちやうていの徴用ちやうようによって大いに

栄えましたが、鎌倉時代の武家社会に入ってから、須恵器は歓迎されず、

徐々に衰退し、やがて、六古窯（瀬戸焼・常滑焼・越前焼・信楽焼・丹波焼・備前焼）と言われる、日本独自の陶芸文化が發展します。

須恵器が原点になって、大きな發展を遂げた備前焼は、他の産地とは逆の歴史を辿って大きく發展していきます。

宗峯さんは、現代人が忘れかけている、備前焼の原点である須恵器を充分理解した上に立つての備前焼でなければ、備前焼の未来は、やがて、立ち行かなくなるのではと危惧しました。須恵器復元に命をかけた理由の一つに、宗峯さん自身にも止めようのないほど、次々、体中からわき出る備前焼への熱い思いがあり、自身が納得するまで突き進むのでした。

#### 四 宗峯さんの作陶



宗峯さんの作陶に注ぐ情熱は、異常とも思えるほどすさまじいものでした。39歳、古代の須恵器が多く焼かれた窯跡と唐人墓が散在している佐山の山裾に穴窯一号を築き、作陶の根拠地を佐山に移します。普通であれば一基の窯に必要な陶器数500個を1年かけて準備して窯焚きするの

一般的なやり方です。しかし、宗峯さんは春・秋の年2回窯焚きをし

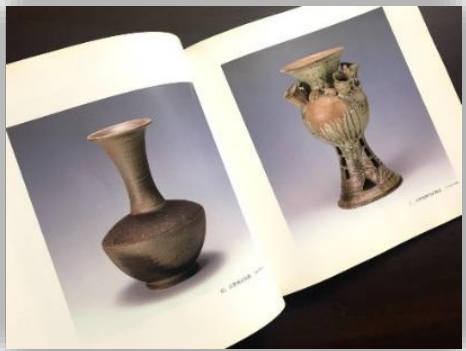
す。そのためには、常に轆轤ろくろを回し続けなければなりません。

数々の陶芸展に出品した作品は、次々、入賞。デパートや画廊での多くの個展も熟こなしました。これぞ、宗峯さんが心から納得し、満足する須恵器復元に捧げた作陶人生と言えましょう。宗峯さんは、存分な作陶を続けるには、窯を増やす必要に迫られます。しだいに、佐山に五基の窯を完成（昭和52・昭和56・昭和60・平成4・平成14）させ、開いた個展19回、種々の展覧会入選42回。特に奈良県明日香画廊で開いた「初釜 須恵器再現展」は大きな反響を呼び、NHKテレビ・ラジオ出演や民放局みんぽうきょくの番組、「中国焼物探訪」「韓国焼物探訪」に出演し、須恵器の普及に力を注ぎました。

### 五「好本宗峯の仕事」注③

倉敷考古館館長 間壁 忠彦 まかべ ただひこ

備前焼のルーツである古代須恵器の地肌を求めて、好本宗峯氏が、備前佐山に穴窯を築いてから、すでに数年が過ぎた。この種の仕事にとり組むときには、古いものの単なる模倣ではないかとの危惧が、常に付きまとうものである。注④酸化焰焼成さんかえんしょうせいで赤い色あいの備前焼を作り続ける陶芸家が、須恵器の色の色調をめざして注④還元焰焼成かんげんえんしょうせいを行ううのは、ちやうど須恵器から備前焼への道を逆にたどることとなる。それは、もはや忘れられた道ではあるが、これを通らねば備前焼は生まれ



てこなかった。備前焼の美を求めるとき、この道へ遡行するのは、備前焼の本質を知る証拠である。しかも、焼き締め陶、備前焼の技法の上にたつての仕事であるから、灰白色の肌に光沢を持つことになる。それは、すでに古代の須恵器から踏み出した肌あじである。加えて、窯内

で灰をかぶり、器には窯変がでる。いわゆる自然釉で、それは、明るい灰色の地肌とのコンビネーションをなす。この自然釉も、須恵器のように窯のごく一部で起こるのではなく、窯の随所にあられる。

備前焼が、古風な無釉の伝統を続けて発展した理由には、焼き締めて強い焼き物へというたゆまぬ努力から、自然に生まれた窯変の美が大いに役立つたといわれる。好本氏の還元焰焼成も、灰白色の器表に、緑色を基調にしながら変化に富む自然釉が流れ、自然に生み出された備前焼の美の出発点と共鳴する。

この窯作りと窯焚きには、多くの工夫と努力が積みまれてきた。還元焰焼成の経験談は、窯址や出土陶器を調べる私どもにとっても、参考になる点が多い。この焼成法から生まれ出る独特の窯変の図柄を、どのよ

うな器に着せて行くのか。好本氏にとって、須恵器色の備前焼を大成さ



せる大切な一里塚いちりづかが、今回の作品だと思っている。多くの方々からどのような御批評が出るのか、大いにたのしみである。(昭和60年2月)

## 六 お別れの時



早朝、佐山に行き、轆轤ろくろに座ると帰宅は決まって真夜中。このような生活が30年も続きました。68歳で穴窯五号が完成した直後、ついに体が悲鳴ひめいを上げ、脳梗塞のうこうそくを発症しました。続いて小脳出血しょうのうしゅつけつの発症。

病魔びょうまは、次々、宗峯さんの体を蝕むしばんでいきました。高度の治療と手術を受けますが、制作意欲が旺盛だった、かつての生活に戻ることは出来ませんでした。とうびよう闘病生活18年の末、2020年9月16日、82歳で、やっと、長い休暇を得たかのように永遠の眠りにつきました

火入れできなかつた穴窯五号は、子息が受け継ぎ、宗峯さんの窯焚きを待ち望むかのように、佐山の山裾で火を燃やし続けています。

2021年9月16日

「感謝を込め、故好本宗峯氏に捧げます。」

・参考文献 好本宗峯『備前須恵器再現展』図録 天満屋岡山店発行

注 釈 ①好本宗峯『備前須恵器再現展』図録 「作家の言葉」

② 緑和堂ホームページ ([好本宗峯 \(ryokuwado.com\)](http://ryokuwado.com))

③ 好本宗峯『備前須恵器再現展』図録 「好本宗峯の仕事」

④ 酸化焰成焼と還元焰成焼 [https://tourjoji.com/elementary-](https://tourjoji.com/elementary_knowledge/syousei.html)

[kary\\_knowledge/syousei.html](http://tourjoji.com/elementary_knowledge/syousei.html)

・協 力 好本美代子氏 (故 好本宗峯氏 夫人)

坂口宗憲 (憲一郎) 氏 (礎ハソウを楽しむ会会長)

編 集 高舘 千枝子

〒028-3603 岩手県紫波郡矢巾町西徳田7-7

